



## NIIの総合目録データベースについて

著者	濱生 快彦
雑誌名	関西大学図書館フォーラム = Kansai University Library forum
巻	9
ページ	85-88
発行年	2004-06-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/8139">http://hdl.handle.net/10112/8139</a>

## NIIの総合目録データベースについて

濱 生 快 彦

### はじめに

平成15年9月29日（月）から10月10日（金）にかけて、国立情報学研究所が主催する「総合目録データベース実務研修」に参加させていただくことが出来た。当館からは平成11年度に次いで2回目の参加となる。その間、かつての学術情報センターは、国立情報学研究所に改組された。本学の図書館の業務も、業務システムのオープンシステム化とアウトソーシングを導入したことにもなっており、国立情報学研究所（以下略記として一般的なNIIと記す）との関係がより深くなってきている。特に、書誌データの形式をNIIの方式に準拠させ、目録業務をNIIが運用する総合目録データベース（以下NACSIS-CATと記す）を全面的に利用する形態へと変更させたことの影響は極めて大きい。そもそもこの研修への参加を希望したのも、もともと目録業務に関心があったこともあるが、このような業務の変更により、NACSIS-CATに関する詳しい知識が本来必要であるにもかかわらず、業務上の経験では、十分な研鑽を積むことができないと感じていたからだった。また、後述するがNIIの個々数年の事業の拡大は瞠目すべきものがあり、学術情報の収集、組織化、提供に携わる組織として動向に注目していく必要もあると思われる。この小稿でNIIの事業と本学図書館の業務のかかわりについて少しでもお伝えすることが出来ればと思う。

### 2 研修の概要

この研修の目的は、主催するNII成果普及課のウェブサイトによれば、「目録所在情報サービスに関わる最新の知識を習得し、業務担当者の指導を行うなど、各機関において中核となる職員の養成」することとなっている。また、この研修の修了者は、目録所在情報サービス（NACSIS-CAT）の構成、内容、データ登録の考え方（入力基準）などを理解するた

めの目録システム講習会の講師を担当することがある（この研修を終了することが講師の要件になっているわけではないが）。そのため、カリキュラムは、NACSIS-CATの操作等よりも、むしろ背景にある考え方（「目録所在情報サービスの基本思想」「NACSIS-CATシステム概論」等）や、データベースの品質管理の問題（「総合目録データベースの品質管理概論」等）参加館が実際に運用するに当たって直面している課題（「目録情報の基準とその運用（図書編）」、「多言語資料の取り扱いについて 和漢古書資料」等）などが中心となっており、他にはNIIが比較的最近開始したサービスに関する講義も多かった（「グローバルILL」、「事例研究2：メタデータ・データベース」等）。また、目録システム講習会の講師となる場合もあるため、講習会の実施に関する講義や受講生に対して話をするためのプレゼンテーションに関する演習、同じ時期にNIIで開催されていた目録システム講習会の見学も行われた。講義以外では、目録業務のアウトソーシング化が全国的に普及しつつある現状を踏まえて、本学でも業務を委託している図書館流通センターと、実際にアウトソーシングを実施している明治大学図書館に見学に赴いた。他に、グループ演習として、参加者が4人程度のグループに分かれ、それぞれが関心のあるテーマについて課題を設定し、検討の結果をプレゼンテーションした上でレポートにまとめるプログラムもあった。参加者は、NACSIS-CATの全国の参加機関から選ばれ、今回の参加者は国立大学8名、私立大学4名だった。近畿圏では、立命館大学、京都大学法学部図書室からの参加があった。

### 3 国立情報学研究所（NII）の事業とNACSIS-CATについて

NIIは、前身である学術情報センターを改組・拡充して平成12年に設立された国立の大学共同利用機関である。古書街で有名な神保町の近く、千代田区一ツ橋の学術総合センターという巨大なビルの、13階から22階にある。研修は20階で行われたので、一

日の講義が終わって廊下に出ると、遠く新宿の方へ(だと思っただが)落ちていく大きな夕陽が見えた。

NIIでは、平成12年の改組・拡充後も、最先端の情報学の研究・教育活動と、NACSIS-CATに代表される学術情報システムの運用を続けている。NACSIS-CATやNACSIS-ILL等のサービスのよう、従来から提供されてきたものもあるが、NII発足後、学術コンテンツ・ポータル(GeNii=ジーニイ)の運用を開始するなど、事業の充実拡大が顕著である。研究・教育機関としても、総合研究大学院大学に参加し、情報学専攻を開設している。また、本学もノード機関として選定された、学術情報ネットワーク(スーパーSINET)の開発・運用を行っているのも、NIIである。

比較的最近の新しいサービスとしては以下のようなものがある。

#### (1) メタデータ・データベース共同構築事業

国内の大学等の学術研究機関がインターネット上で公開している学術情報資源のメタデータをデータベース化し提供するもの。平成15年3月に、GeNiiのメニューから、大学情報メタデータ・ポータル(JuNii)として試験公開を開始している。登録レコードは約60,000件。関西大学は参加していないが、平成15年6月時点で、266機関(うち私立大学は107校)の参加があり、この数字はNACSIS-CATの4分の1程度となっている。この事業については、研修の中でも「メタデータについて」「事例研究2:メタデータ・データベース」と2つの講義が行われた。この事業の特徴は、各研究機関における学術情報のリポジトリの構築を支援したうえで、各機関に一定の規則にそってメタデータを作成してもらい、そのメタデータをNIIがいわば取りまとめて提供していることにある。データの登録(ハーベスティング=刈り取りと呼ぶ)に、OAI-PMHという共通のプロトコルを用いることで、全自動のデータ交換が可能となっている。こうして各機関がリポジトリを構築することにより、たとえば研究者個人のウェブサイトを保管し登録することで、仮にその研究者が亡くなりインターネット上では見ることができなくなっても、リポジトリの中に保管されることになる。かつ、そのデータはJuNiiを通じて学外の利用者にも利用が保証される。

JuNiiもNACSIS-CAT同様、共同分担入力方式が取られているが、取り扱う資料の特性から既にある

メタデータをダウンロードして使うことなどが事実上不可能なため(自身が電子化した資料について他機関が既にメタデータを作成している可能性は小さい)、NACSIS-CATを目録作成業務に利用するときのように業務の効率化を期待することは難しそうだが、独自に学術情報を発信しようとする場合には、先行事例としてそのデータの記述規則等を参考にすることが可能である。

#### (2) 学術情報資源ポータル(GeNii=ジーニイ)

NIIでは、これまで目録所在情報サービス、情報検索サービス、電子図書館サービス等の、研究者にとって有用な事業を提供してきたが、これらの各種サービスを連携させ、総合的に利用可能なポータルサイトとしてGeNiiの構築を進めている。CiNii(NII引用文献情報ナビゲータ)、研究紀要ポータル等の論文情報、Webcat(総合目録データベースWWW検索サービス)、Webcat Plus等の図書・雑誌情報、大学が生産するJuNii等のコンテンツが公開されている。

## 4 本学図書館の業務とNACSIS-CATについて

本学図書館の目録業務はその多くをアウトソーシングしているが、和書、洋書ともほぼ全面的にNACSIS-CATを利用して業務を行っている。NACSIS-CATは、わが国の事実上唯一のオンライン総合目録であり、その参加館は平成16年1月31日現在で1021機関、私立大学だけでも474館に上る。登録書誌レコードは約615万件、所蔵レコードは、7000万件を突破した。本学図書館でも、新規書誌を平成14年度の数値で、5644件登録しており、この数字は私立の大学図書館としては、第4位、全体でも19位に位置する。これは、平成14年度より目録業務を全面的にアウトソーシングし、かつ書誌レコードの形式をNACSIS-CATに準拠させた結果、登録件数が飛躍的に上昇したことによるものである。

これらの書誌レコードは、簡単にいえば、手元にある資料の書誌レコードがNACSIS-CATに登録されていなければ新規に作成した上で登録を行い、それ以降に他の図書館で同一の資料を登録する場合には、書誌レコードは既にあるものを使用して(ローカルシステムにダウンロードして)登録済の書誌データに所蔵レコードのみを登録する(「うちも所蔵していますよ」ということだけを登録する)とい

うオンラインの共同分担入力という方法で形成されている。

このように、オンラインで、参加館が共同作成・利用する全国規模の総合目録データベースを提供する機関は、もともとは1967年に設立されたアメリカのOCLCが最初のものであるが、その後、カナダのUtlas、アメリカのRLG、イギリスのSWALCAPなど各地に同様の組織が活動を進めていく中で、日本でも同じようないわゆる書誌ユーティリティの必要性が叫ばれるようになった。NACSIS-CATはその結果、1980年の学術審議会答申「今後における学術情報システムの在り方について」等を経て、最終的に1985年に誕生した。

NACSIS-CAT誕生の背景に関して、研修の中ではその誕生にかかわった宮澤先生から「NACSIS-CATの基本思想」という講義がなされた。宮澤先生の講義によると、NACSIS-CAT成立の背景には、

図書館電算化が試行されていた JICSTなどの情報検索サービスが研究者の関心を集めていた コンピュータサイエンスの分野でリレーショナルデータベースという考え方が注目を集めていたことがあったという。こうした社会的な環境の中で、学術資料の総合目録を大学の研究者に安く提供してほしいという研究者側の要望と、OCLCのような書誌ユーティリティが日本にも欲しいという図書館側の要望が一致し、1980年の学術審議会答申に結びついた。NACSIS-CATのデータベースの骨格は先行するOCLCなどの例が、いわばこれまで蓄積されてきたカード目録をコンピュータで利用可能な形に置き換えるという発想で作成されている事実を参考にしつつ、本来目録があらわしたいものをそのままデータベースにしてみるという発想で検討され設計されている。NACSIS-CATの書誌の構造が、たとえば海外で一般的なUS-MARCフォーマットと大きく異なっているのは、この根本の発想の違いによるものと思われる。その思想の骨格は、表現したいものを「実態」と「関係」に分けて表現するという点にある。“ どのような著者がどのような著作を書き、その著作のどのような版をどのような図書館が所蔵しているか ” を表現するのに適切なデータベースとはどのような構造を持てばよいかを、NACSIS-CATでは、「物理単位」と「書誌単位」という概念を使って実現している。「物理単位」とは、ここの図書館が所蔵し、貸し出しを行う物理的な1冊の本を指す。「書誌単位」とは物理単位として複数あっても書誌的に同一の資

料を表現する。すなわちひとつの「書誌単位」は複数の「物理単位」を通常持つことになり、図書館 <所蔵する> [書誌単位] の関係が成立する。著者の著作と書誌単位を必ずしも同一のものとする考えは本来はできない。たとえば、複数の著者の著作を集めたアンソロジーなどがよい例で、この場合の書誌単位はそのアンソロジーを単位として作成するほかない。こうした例ではあまりに人手がかかりすぎるため、こうした例は無視して、書誌単位と著作を同一視することにしている。そうした結果、[著者] <著す> [書誌単位] の関係があると考えられるようになる。この書誌単位は階層を持つ。当初、階層は無制限に作成可能にするように考えていた。欧米では、階層というと、著作がシリーズ名の中に含まれる場合が検討の中心となるが、日本の出版物では個別の著作が上中下巻で刊行される場合も考慮する必要がある。上中下巻のように、出版の都合で物理的に別々に刊行される例は、日本の出版慣行の特徴で、たとえば欧米ではどんなに分厚くなっても1冊で出版される場合が一般的であるようだ。したがって、NACSIS-CATでは、上記の様なセットもの、また全集なども処理できるように設計する必要があった。そこで、総合目録としてどこの図書館が所蔵しているかを把握するために、所蔵をつける単位を絶対的に固定するという方法を採用した。具体的には、著作が固有のタイトルを持っているかどうか書誌作成の単位となっている。これによりたとえば、百科事典の各巻に書誌レコードを起こすような無駄が省かれるようになっている。こうした書誌データの記述の方法は、考え方としては新しいものではないが、明文化し、規定化した点が非常に新しかったといえる。また、階層を無制限に作成するという点については、煩雑だという現場の意見があったため、最上位と最下位のみレコードを作成するように改めた。NACSIS-CATでは、TR(本タイトル)とPTBL(親書誌)でこの関係が表現されている。

## 5 NACSIS-CATの品質管理

これだけの参加館とレコード数を保持する場合に、もっとも重要なのはデータベースの品質の管理である。研修においても概論・演習と併せて半日が品質の管理にあてられた。NACSIS-CATにおける品質の管理とは、規則に則った一定水準の正しいレコー

ドが重複することなく登録されるということにつ  
 きる。 の規則とは、NIIが発行する「目録情報の  
 基準」「コーディングマニュアル」のことで、各参  
 加館にはこの規則に習熟することが求められる。  
 NACSIS-CATでは、 の実現のために、レコー  
 ド調整という方法を採用している。レコード調整は、  
 参加館相互の協力により、登録された書誌データを  
 メンテナンスしていく仕組みである。つまり、ある  
 レコードについて誤りを見つけたら、そのレコード  
 を作成した組織と協議の上、修正していくことでデ  
 ータベースの質を維持している(注;実際の運用は、  
 もう少し細かく、 誤りを見つけた館が修正してよ  
 い 書誌レコードの作成館と協議する必要があると  
 いう 参加館からの依頼によりNIIが行うパターン  
 があり、それぞれについて、所蔵館に連絡が必要か  
 どうかも定められている)。特に、重複レコードを  
 作らないということについては、目録システム講習  
 会においても、登録の際には事前によく検索するこ  
 とが強調されており、品質管理におけるもっとも重  
 要な点であるといつてよい。ところが、ここ数年、  
 重複による書誌レコードの削除件数が増加しており、  
 傾向としては比較的最近作成された書誌レコードに  
 ついて発生する率が高いということであった。NII  
 でも、重複書誌の増加の原因と調査中とのことで、  
 研修中にも重複レコードを認めるべきかどうかにつ  
 いてアンケートがあった。また、あまりに重複レコ  
 ード作成が多い参加館については、個別に運用を確  
 認することも考えているということであった。特に、  
 本学の図書館で重複レコードの作成が多いというこ  
 とはないが、目録業務をアウトソーシングしている  
 関係上、その品質管理をどのように考えていくかは、

このようにNACSIS-CATとの関わりからも課題で  
 あると思われる。

## 6 所感等

研修の初日の挨拶で、NIIの方から、参加者には、  
 NACSIS-CATの最新の知識を得ると同時に、NIIが  
 どの方向に向かおうとしているのかを伝える伝導師  
 の様な役割を果たして欲しいということと言われた  
 が、実際の研修の内容にもたとえばOAI-PMHとい  
 う通信プロトコルを用いたメタデータデータベース  
 共同構築事業の事例など、単にNACSIS-CATだけ  
 でなく学術情報の組織化という広い視点での事業の  
 拡大について知ることもできた。

この研修に参加するまでは、そもそもの目録の業  
 務がほぼすべてアウトソーシングを導入している上、  
 実務を経験したことが殆どないことから、不安であ  
 ったが、職場の先輩の事前の丁寧な指導のおかげで、  
 無事に終えることができた。振り返ってみると、カ  
 リキュラムや講師の方々をみても非常に充実した、  
 贅沢な内容であったと思う。また、2週間というの  
 は職場を離れるには長い時間だが、日常業務から離  
 れることによって、NACSIS-CATの書誌データの  
 ユニークさについてゆっくり考えてみたり、本学で  
 はまだ着手していないメタデータについて他大学  
 の方と話をしたりすることが出来た。研修のグループ  
 演習では、私は目録業務のスキルアップをテーマに  
 選択したが、アウトソーシングの導入はマネジメ  
 ントに必要な知識を要求している。NIIとNACSIS-  
 CATについて今後も注視し、学んでいきたいと思う。

(はまお やすひこ 学術資料課)